

研究の現場を知る

きっかけ

父の実家が鹿児島県で、原爆被害者のときから知覧に暮らして来た。父は戦時中に行き、戦争の被害者になった。大学時代、戦争や貧困がテーマで、戦争終結後、像ジャック、グロ漁船がアメリカ軍によって被害を受けた。全国的な原水爆禁止運動が起りました。

原爆被害の実相が知られるように、被爆者の提議が進んでいきました。しかし同時に、深刻な被爆者差別も生まれました。

このように、原爆や放射能の捉え方は、それらが危険だと考えれば、そのように切り取ることができますし、危険性が低いと考えれば、危険性を排除して切り取ることもできます。伝える側の視点で、流通する知識は大きく変わってくることを示唆しています。

今後の研究課題

原爆被害をめぐって科学調査を、人

間の視点から捉え直すことです。科学は原爆被害の全容を探ろうとしてきましたが、それは不可能であり、歴史を作っているのは一人一人の人間です。科学が掬いきれないような声に耳を傾けていきたいと思っています。

例えば、原爆の人体影響を調べるため広島と長崎に設置された米国のAEC（原爆傷害調査委員会）の調査について、調査される市町村はどういう感情を持っていたのか、被災地の広島で学び教える研究者として、広島の人々の経験を学びながら研究を進めていきたいです。

これから

学生や、アーティストなどさまざまな人たちと一緒に、原爆の記憶を掘り起こしながら、今の人たをどう現場をつくらしていきたい、と思っています。社会や人とつながる研究者になりたい、と願っています。